

令和元年6月25日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26780432

研究課題名(和文) 価値移行期における世界の表象と伝達に関する思想史的研究 - コメニウスの教育思想から

研究課題名(英文) Representation of the world in Comenius's educational thought

研究代表者

下司 裕子(北詰裕子)(GESHI, Yuko)

青山学院大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：30580336

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代教育学の祖と位置付けられてきたコメニウス(1592-1670)の教育思想における表象の特徴とは何かを明らかにするために、以下の三点について研究を行った。第一に、絵入り教科書である『世界図絵』と脚本形式の『遊戯学校』を比較検討するために、『遊戯学校』のラテン語テキストの日本語翻訳を進めた。第二に、表象論一般のなかでコメニウスの教育思想における表象はどこに位置づくのかを検討した。第三に、17世紀を諸価値移行期として捉えた場合、どのように「教育」が語られ、提示されたのかという観点から、コメニウスの主著とされてきた『大教授学』のなかの喩えに着目し、特に庭園と植物のメタファーを分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コメニウスは学校システムの考案や一斉教授、学年編成やカリキュラムの考案、教科書の作成等により、その後の近代教育において展開した普通教育(学校教育)の枠組みを構想した人物として位置づけられてきた。本研究では、コメニウスの教育思想における表象の特徴を、書物や演劇といった手法で子ども達に伝わる世界とはいかなるものか、また、教育をその時代のいかなる物事とのかかわりの中で捉えているのかという観点から明らかにし、現代の教育における表象への問い(子どもたちに今ある世界をどのようなものとして伝えるのか、それはどのようにしたら可能なのか)の歴史的参照点を提起するものである。

研究成果の概要(英文)：In this research we considered the characteristic feature of educational representation of Johannes Amos Comenius(1592-1670). 1. we analyzed of the way of representation in Orbis Pictus(1658) and Schola Ludus(1656), it showed that each gives different experience about the world to children. For comparing Orbis Pictus with Schola Ludus, we translated the text of Schola Ludus from Latin to Japanese. 2. In general representation theory, we examined where the educational representation of Comenius is located. 3. If we consider the 17th century as a transition period of values, how was "education" explained and re-presented? From the point of view, we focused on metaphors in Comenius's Didactica Magna and analyzed the metaphors of garden and plants in particular.

研究分野：教育哲学 教育思想史

キーワード：コメニウス 17世紀 表象 教育思想 メタファー

1. 研究開始当初の背景

従来コメニウス (Johannes Amos Comenius, 1592-1670) は近代教育学の祖として位置づけられてきた。彼の『教授学』(Didactica Magna, 1657)は「すべての人にすべてのことを」教える普遍的な方法を提案したものとして、のちの近代教育における普通教育の理念の先取りとして高く評価されてきた。

また、彼の『世界図絵』(Orbis Pictus, 1658)は、子どものための世界初の絵入り教科書として、世界の様々な事柄について図絵を媒介に文字や言葉を教える工夫された教科書と位置づけられてきた。こうした位置づけにおいては、コメニウスの教育思想は、のちの近代学校につながるような学校システムの考案や一斉教授、年齢ごとの学年編成やカリキュラムの整備、学校で使用する教科書の作成等、近代教育に影響を与えた発想を中心に研究されてきた。

こうした研究をふまえても、研究代表者がこれまで行ってきたのは、17世紀という文脈にコメニウスを置き直し、その教育思想を読み直すことであった。それは、一つには、近代教育の祖と位置付けられてきたコメニウスのなかにみられる近代教育とは異なる側面に光を当て、その特徴を明らかにすることを通して、近代教育のなかの近代性そのものを問い直すという意図があった。

そのために、17世紀的な社会的・文化的文脈や認識論的背景に着目しながら、『光の道』(Via Lucis, 1668)や『世界図絵』を普遍言語やエンブレム・ブックの関連で読み直し、また脚本形式の『遊戯学校』(Schola Ludus, 1656)を当代のレトリック教育や身振り言語との関連で読み直してきた。しかしながら、『世界図絵』や『遊戯学校』については、参照した文化的背景も含め十分に検討できたとは言えず多くの課題を残した。同時に、コメニウスにおける表象の問題についても同様であった。

2. 研究の目的

そのため、本研究が目指したのは、コメニウスの『世界図絵』や『遊戯学校』といった著作の内容と形式が、教育的に効果的であると17世紀においてみなされた理由を明らかにすることであった。

それは、17世紀という諸価値の移行期のただなかにおいて、次世代を担う子供たちに、世界をどのようなものとしてとらえて、いかにすれば示しうるとコメニウスが考えたのか、また、それを支える根拠とは何かを明らかにすることでもあった。

翻ってこのことは、現代を生きる私たちが引き受けている教育における表象の問い(現在の社会状況において何をいかに取捨選択し、いかなるものとして世界像を再構成し、それをどのような形式で示しうるのか)に対する一つの歴史的参照点を提供することになると考えた。

そのため、本研究では、コメニウスのラテン語原典の精読を軸にテキスト内在的な分析をおして、コメニウスにおける教育的表象の特徴を考察した。

3. 研究の方法

思想史研究の手法にもとづいて進めた。コメニウスの一次文献の精読と、国内外の諸先行研究や関連する諸領域の二次文献の調査と整理、それらを比較・分析・総合しつつ研究を進めた。

分析をした主な一次文献は、下記のとおりである。

『遊戯学校』(Schola Ludus)については1675年版の『教授学著作全集』(Opera Didactica Omnia)の複製版と、アカデミアから出版されている『コメニウス全集』(Opera Omnia)に所収されたものとを比較参照しつつ精読と翻訳を進めた。

『世界図絵』(Orbis Pictus)については、主に『コメニウス全集』(Opera Omnia)に所収されたラテン語・ドイツ語版を用い、訳語については井ノ口淳三訳『世界図絵』ミネルヴァ書房1988を参照した。なお『世界図絵』については、表象の特徴を初版以降の異版本との関連から見るために、いくつかの異版本もあわせて分析した。(J.A.Comenii, Orbis Sensualium Pictus, London, 1659等)

『大教授学』(Didactica magna)については、『教授学著作全集』(Opera Didactica Omnia)の複製版と、アカデミアから出版されている『コメニウス全集』(Opera Omnia)に所収されたものを用い、訳語については、鈴木秀勇訳『大教授学』明治図書、1962を参照した。

『知恵の藁』(Ventilabrum Sapientiae)、『教授学著作全集』(Opera Didactica Omnia)所収。

なお、コメニウスの『世界図絵』との比較のために参照した当代のエンブレム・ブックの一次文献として、スクエ『人生の永遠の道』(Antoni Sucquet, Via Vitae Aeternae, Antuerpiae Typis Martini Nutii, 1620)。イエズス会は多くのエンブレム・ブックを世に送り出しているが、そのなかの一冊であり、図版のなかの絵にはアルファベットがふってある。

上記 ~ の精読を軸に、これらのテキストについての国内外の先行研究や関連領域の諸研究を二次文献として使用し、解釈枠組みの精緻化を行いながら研究を進めた。

4. 研究成果

主な研究成果は以下の3点である。

第一に『世界図絵』と『遊戯学校』を比較・分析するに先立って、『遊戯学校』のラテン語原典を翻訳する作業を行った。研究計画の段階で見込んでいたよりも実際には時間を費やすこととなり、全研究期間をとおして通奏低音のように響きつづける作業となった。訳文についてはいまだ検討の余地があるため、研究期間内に対外的に発表するまでには至らなかったが、精読をつづじて、コメニウスが教育について語るときの言葉の選び方や使い方、表現の仕方のなかにこそ、まさに諸価値の移行期としての17世紀において、教育がどのように表象可能とされたのかの一端を知る手掛かりを見出すことができた。

この研究期間のあいだに、井ノ口淳三の『世界図絵』の異版本研究のように、『世界図絵』のその後の広がりを歴史の中にたどり言語教科書としての影響力の大きさと内容の変容を明らかにする研究がなされたように、『世界図絵』研究においてもその解釈枠組み自体が広がってきたといえる。本研究もまた、『世界図絵』の解釈に関して特に17世紀のエンブレム・ブックとの異同を中心に検討を進めたが、17世紀の諸エンブレム・ブック自体の読み込みが困難をきたし、まとまったかたちで成果を発表するにはいたらなかった。とはいえ、たとえばイエズス会における教化目的のエンブレム・ブックの内容や、A.スクエの『人生の永遠の道』といった特殊な世界観が17世紀において一つの流れを形成していたことをふまえてうえで、『世界図絵』や『遊戯学校』の表象形式について論じる必要があることは明らかになった。

第二に、表象論一般の中で、コメニウスの教育的表象がどのように位置づけられるのかについて考察をし、『教育思想事典』の「表象」の項目において成果の一部を発表した。なお、コメニウスにおける教育的表象の特徴について17世紀的な思想的文脈の中で検討する作業の成果については、いまだ検討の余地があり、成果の発表は見送った。

『世界図絵』における図示や、コメニウスの事物主義として位置づけられてきた思想を、当代の博物学や寓意画、前世紀において隆盛した「驚異の部屋」との関連から読み解くこと、また、『遊戯学校』を当時の世界劇場(テアトル・ムンディ)という認識論的背景との関連については、引き続き検討が要される。事物主義の読み直しの文脈でとらえれば、明治以来位置づけられてきたコメニウスのいわゆる「実物教授」といわれるものが、どのような歴史的背景とつながりうるのかを検討する必要があると考えられる。これまで研究代表者は、コメニウスの事物を重視する思想の背後に、事物に内在する神の御業という神学的な世界観があることを明らかにしてきた。このことはコメニウスの複数の著作を検討するなかで、テキスト内在的に分析した結果である。上述した「驚異の部屋」は、世界の様々なモノをひたすら陳列し、そのものが一体何なのかを眺める空間である。コメニウスの『大教授学』で語られる実物を教室に配置するといった発想や、エンブレムを飾るといった発想とどのように繋がるのか、あるいは繋がらないのかを検証することが引き続き求められるであろう。

第三に、第一の成果と関連するが、17世紀を諸価値の移行期として捉えた場合に、どのようなものとかかわりのなかで「教育」がとらえられ、説明されたのか、その説明がなぜ説得性を有するとコメニウスが考えたのかということについて、『大教授学』における喩え(メタファー)を分析することでその一因を明らかにし、その成果の一部を論文にまとめ、発表した。コメニウスは教育を語るときに、様々なメタファーを使用するが、論文では特に『大教授学』に限定し、そのなかで極めて多く使用される植物や庭園といった喩えが、種子、若木、接ぎ木、樹木、野生の樹、剪定、園丁、楽園等一連の参照系を経由して子どもや人間そのもの、さらに教育的行為に適用されていたことを明らかにした。また、メタファーが説得性を有するとコメニウスが考える根拠の一つに、コメニウスが採用する類比という方法への信頼があることを明らかにした。コメニウスが類比の効果を評価する大きな理由の一つに、その方法こそがキリスト自身がとった手法でもあるという聖書解釈があった。コメニウスにおいては、喩えが教育を表象するものとして有効であるためには、一定の参照系(例えば、種子、若木、接ぎ木、樹木、野生の樹、剪定、園丁、楽園等)が存在し、その参照系を経由することが真理をなぞることにつながるという想定がある。その参照系を基礎づける観点が自然 *natura* とよばれるものであった。

また、17世紀をルネサンス・宗教改革との関連から諸価値の移行期として捉えた場合、コメニウスの教育思想がどのように再読できるのかについての研究成果の一部を、『教育原理』のテキストの一部として発表した。第一に、アウグスティヌス以来のキリスト教的な人間観とそれに基づく教育観が、ルネサンスの人文主義者たち、またルターをはじめとする宗教改革者たちにおいてどのような変奏がなされたのか、自由意志や教育可能性といった発想がどのようにコメニウスにみられ、それらはルネサンス・宗教改革期のものとどのように重なり、ずれるのかについて、考察を試みた。第二に、印刷技術の発展と拡大にともなって、聖書や古典作家の著作や、教科書が、それぞれどのような書物観とともに教育と結び合わされたのかを考察した。第三に、17世紀という伝統的社会から近代社会への移行期に、上記の2点がコメニウスにおいてどのように接続し、具体的な教育構想につながったのかを論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

北詰裕子「コメニウスの『大教授学』における庭園の喩え 『教授学著作全集』の扉絵解釈試論」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第 10 号, 2019, pp.37-52. 査読無し

岡部美香、北詰裕子、室井麗子、高橋舞「例示 / 例外の政治学」『教育哲学研究』第 115 号, 2017, pp.126-132. 査読有り

〔学会発表〕(計 1 件)

北詰裕子「エンブレム・ブックと教科書のあいだ コメニウスの『世界図絵』における教育的表象」
国際エンブレム協会日本支部 エンブレム研究会第 24 回研究会、2019 年 4 月 28 日、於成城大学 716 教室。

〔図書〕(計 2 件)

木村元・汐見稔幸編『教育原理』ミネルヴァ書房、(執筆箇所：北詰裕子「第 5 章 宗教と教育」) 入稿済、2019 年 8 月出版予定。

教育思想史学会編『教育思想史事典』勁草書房, 2017 年。(総ページ数 869, 執筆箇所：北詰裕子「表象」pp.643-644,)。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

研究代表者のみの個人研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。